

安全な森林環境教育を目指して ～ボランティアと連携した取組事例から～

関東森林管理局 森林整備部

高尾森林ふれあい推進センター 山田 徹

1 課題を取り上げた背景

高尾森林ふれあい推進センターでは、高尾山国有林や体験施設等を活用し、年間を通じて森林環境教育に係るイベントを行っています。特に、小学生を対象とした森林教室については、年間概ね約2千人（約20校）の児童を受け入れています（表1、写真1）。森林教室など森林体験学習においては、多くの児童が林内に入り体験学習を行うことから、常に安全に実施することが求められています。

特に、都市部で暮らし、ネット社会等により、森林とふれあう機会が少ない児童にとっては、自然の中で体験をすることの新鮮さや楽しさがある反面、林内では怪我や事故などが起こり得ることを実施前に分かりやすく説明し、理解してもらう必要があります。このため、児童に対し単に「危ない」というだけではなく、林内で起こり得る「注意点をイメージ」させ、森林体験学習における児童の成長の特性を踏まえた安全対策の進め方について、ボランティアと連携して取り組むこととしました。



表1：森林教室の実績推移



写真1：森林教室の様子

2 具体的な取組

(1) 課題

体験型の森林教室において、林内での注意点を周知するためには、あらかじめ児童に対して、「何が危ない」のかイメージさせる必要があります。特に児童の場合、大人とは違い説明に対する理解力が異なります。そこで、安全な森林教室を実施する課題として次の3点を取り上げました。

- ① 児童は、林内で「何が危ない」のか理解されていないため、注意力が散漫になっていること。
- ② 大人とは違い、「児童の成長の特性を踏まえた注意の伝え方が必要」であること。
- ③ 森林教室を支えてくれているボランティアスタッフと安全に関する共通した認識を持つ

必要があり、このため、「ボランティアのスタッフと連携した安全活動」が重要であること。

森林教室では、児童に対して林内での行動について注意を促しますが、守られないこともあります。その原因は、「解説者が単に自分の話に満足している」「つい専門用語で話してしまう」「児童の反応をつかまえていない」「抽象的な言葉だけで相手の頭の中に絵が浮かんでいない」などが考えられます。

つまり、「抽象」を「具体」にして「言葉を映像化する」こと、「気を付けて」という言い方は、児童は何に気を付けたらよいか理解し難いため、説明する者がその言い方に気を付ける必要があります。

当センターの森林教室の実行スキームは次の図のようになっています（図1）。

年度当初は、林内の歩道等の整備、蜂の誘因捕殺の設置、ボランティア団体への安全教育を実施します。

森林教室を実施する1ヶ月以上前に、学校側（担当教員）と打合せ及び現地確認、実行計画（森林教室当日のスケジュール）などを作成し職員内で共有します。森林教室当日は、学校とは人員、時間帯の変更を含めた確認、それを踏まえてスタッフとの情報共有と安全体制の確認した上で体験活動を実施しています。

組織体制は、児童数にもよりますが、6班に分け、各班につき、解説者1名に対して後方支援としてボランティアスタッフ1名、児童10名前後を1つの班として行動します（図2）。

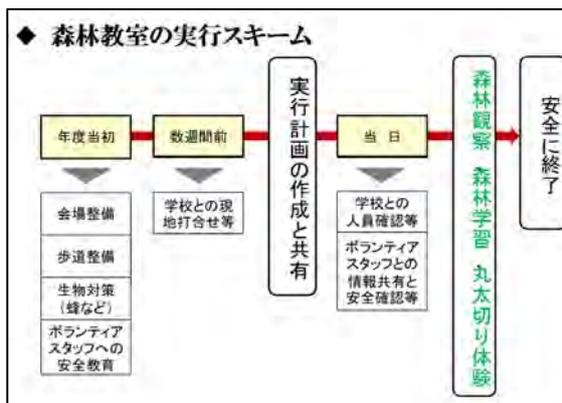


図1：森林教室の実行スキーム

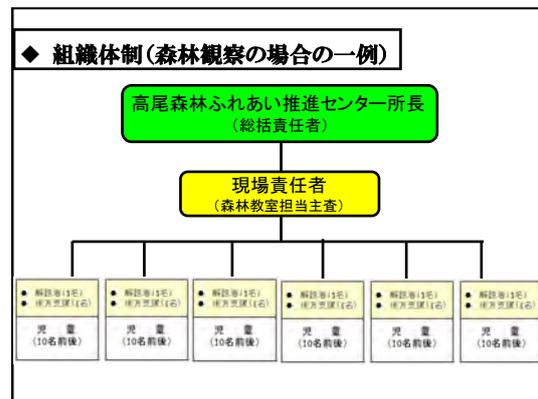


図2：組織体制

(2) 具体的な注意点の伝え方とは

林内での活動は、児童に対して具体的な注意点の伝え方があります。ポイントは、注意すべき「範囲を絞り言葉を映像化する」「イメージが湧くような行動を写真やイラストに示す」「映像は相手の記憶に残りやすい」「怖がらせるよりも、自発的に行動してもらおう」ことです。

そこで、「五感」という感覚を意識しました。五感とは、人間が「目（視覚）」「耳（聴覚）」「鼻（嗅覚）」「舌（味覚）」「皮膚（触覚）」を通じて外界の物事を感じることで、危険をキャッチする重要なセンサーとされています。特に、「視覚」は感覚の80%を占め、脳を刺激するともいわれています。

このような点を踏まえ、具体的な取組として、次の3点を考えました。

- ・児童の成長の特性を踏まえる
- ・視覚により具体的なイメージを増幅させる

・ボランティアスタッフと連携し情報共有する
これら3点について具体的に説明します。

① 児童の成長の特性を踏まえる

児童は、低学年までの場合、「集団行動に付いていけない」「個人の能力差が大きい」「実物を見たことがない子供が多い」などの特徴がありますが、高学年になると「体力、運動能力が向上する」「危険に対する判断力が向上する」「集団規律を理解できるようになる」など成長の特徴があります。つまり、「運動能力が向上」すると危険回避の行動がとれるようになること、「判断能力が向上」すると危険性の有無を判断できるようになること、そして、「集団規律が理解」されるようになることとルールを意識するようになります。

② 視覚により具体的なイメージを増幅させる

そこで、「視覚」により具体的なイメージを増幅させることを意識し、写真やイラストなどを活用して伝える取組を試みました（図3）。



図3：イラストによる注意点の紹介例

蜂の注意説明では、イラストを見せた後、歩道沿いに設置した誘因捕殺の状況を見せ、スズメバチなどの大きさを見せます（写真2、3）。児童からは「予想よりも大きかった」「怖そう」など実物を見せることでより関心や注意が促されます。



写真2：イラストによる説明



写真3：実物による説明

丸太切り体験では、鋸を使用するため、必ず児童に対して、刃物の取り扱いについて、実物を見せて説明します。説明した後は、児童が理解したかどうかを確認するようにしています。説明する話についてもできるだけ短く、わかりやすく話をするようにしています。

③ ボランティアスタッフと連携し情報共有する

当センターでは、イベント等をサポートしていただいているボランティアを年に一度募集し、職員と連携して一年間、取り組んでおり、このボランティアの方々をフォレストサポートスタッフといいます。

毎年度、年度当初に、フォレストサポートスタッフ対して、イベント



写真4：年度当初の安全指導

実施のための安全指導を行います（写真4）。指導のポイントは、「児童への伝え方、観察や気配り」「スタッフ間でのコミュニケーション」「具体的な事故防止対策」などを説明します。

森林教室の当日には、「開始前のミーティング」を行い、時間配分や当日の歩道の状態などの確認し、また、各班の状況などの情報共有などを行っています。終了後もミーティングを行い、その日にあった出来事など振り返りをするようにしています。このように、常にコミュニケーションを図るよう意識しています（写真5）。

また、安全管理を継続的な取組として実施していくために、計画→実行→振り返り（改善等）のサイクルを意識することが重要であると考えています（図4）。



写真5：ミーティング

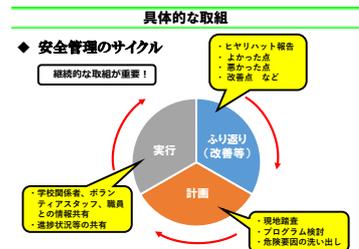


図4：安全管理のサイクル

3 取組の結果

このような取組の結果、児童には以下の効果が現れました。

- ・注意点がよく伝わりルールを守るようになったこと
- ・児童同士でお互いを注意する場面が多くなったこと
- ・職員及びボランティアスタッフ間での児童の様子や注意点が速やかに共有され、安全対策に生かされるようになったこと

4 考察・まとめ

林内で児童が安全に体験活動するための効果的なポイントは、

- ◆ 具体的な注意点を視覚により具体的に「イメージ」させることが安全に進める上で効果的であること。
- ◆ 児童の判断力や運動能力の成長を踏まえ、突発的に発生したアクシデントがあった際には、自分の身は自分で守ることを意識させることも必要であること。
- ◆ 職員とボランティアスタッフは、児童の成長の特性を学び、振り返りによる些細なヒヤリハットや出来事を情報共有し、安全対策を積み重ねること。

以上の3点が効果的であると考えられます。

多数の児童を受け入れる側として、常に安全第一を意識した上で取り組むとともに、スタッフ間のコミュニケーション及び学校とも連携しながら、今後とも引き続き、安全な森林環境教育の実施に向けて効果的な取組を実施していきたいと考えています。

参考文献

- ・海辺の安全対策マニュアル（海辺の自然学校懇談会）（国土交通省港湾局局監修）